

主 論 文 要 旨

No.1

報告番号	甲 乙 第	号	氏 名	関 駿平
主 論 文 題 名 : 都市で酔う／都市に酔う:オーセンティックバーの社会的世界とその維持				
(内容の要旨) 本研究の目的は、「オーセンティックバー」と呼ばれる文化が、東京を代表とする日本の都市において、いかに発展し維持されてきたのかを、社会的世界論の視座から、関連する協働の3つの次元——「世界内協働」「世界間協働」「アリーナ外協働」——に注目しつつ、参与観察、インタビュー、歴史資料の分析などの複合的な方法を用いて、明らかにすることである。 本研究の第一部となる第1章、第2章では、オーセンティックバーをめぐる研究の背景や、従来の研究の成果を示したうえで、第二シカゴ学派の力を借りて、オーセンティックバーを調査するための視座の構築を行った。第1章では本研究の背景として、現代都市と、オーセンティックバーを包括しうる「ナイトタイムエコノミー」や「飲酒文化」との関連を指摘した。都市における飲酒文化は「古くて新しい」対象として近年、ナイトタイムエコノミー（ナイトライフ）やネオクラフトワーク研究の文脈で注目が集まっている。この上で、飲酒文化をポジティブに評価する物語と、その消滅の物語の共存のなかで本研究は、オーセンティックバーの社会的世界を記述し、彼らの生活が都市のなかでいかに維持されているのかを問いとしてかけ、インタビューや参与観察を中心としたフィールドワークや資料調査などからこれを明らかにすることを示した。 第2章で示したものは、本研究が対象と向き合うために構築した視座であった。従来の研究においてもすでに、ナイトライフとしての飲酒文化を丹念な質的調査から明らかにしてきた研究は確認できる。しかし従来の研究においては、都市の飲酒文化を何らかの「地域的」 이슈に関連する器として位置付け、その限定性の中から対象を記述するスタンスが用いられていた。これに対して本研究では、これまで器としてしか描き出されてこなかった都市の飲酒文化それ自体を、「文化」として描き出し、その後に都市的な諸力をそこに見出すというスタンスの必要性を主張した。 このスタンスを実際の調査との関連で実現すべく本研究が参照したのが、第二シカゴ学派の社会的世界論であった。何らかの理論的前提を避け、実際の調査とのかかわりから社会的世界と向き合った H.S.Becker、A.Strauss、E.C.Hughes、H.Blumer などの論者の知見を参照することで、本研究では協働の3つの次元と、社会的世界のプロセス				

に着目する視座を構築し、調査との接続を模索した。こうした研究に力を借りて本研究では社会的世界としてのオーセンティックバーを、そのヴェールを取り除くとともに「透明に描く」ことを試みた。

この第一歩として第二部「オーセンティックバーとはなにか」で行ったのは、社会的世界オーセンティックバーの前提を成す世界内協働（中心的活動）を支えるものと、その社会的世界の発展プロセスを示すことであった。

第3章では、中心的活動の前提となるアーキテクチャとマテリアルに着目し、オーセンティックバーの店内空間が、審美性の原理に支えられている空間であると共に、客に身体的な制約を、逆にバーテンダーには可動性をもたらし空間であることを示した。また、店内においては、バーテンダーを契機としてアーキテクチャのなかでマテリアルが不可視の領域へ移動することで、店内の「美しさ」が体现されるメカニズムを記述した。本研究は基本的にはこのような「モノ」に溢れる店内という前提で行われる世界内協働から、社会的世界を描いてきた。

続く第4章では、オーセンティックバーにおいて特徴的に確認できるコミュニケーションのあり方について、参与観察を中心に分析を行った。ただし本章は、多くの飲酒文化研究が指摘してきたように、オーセンティックバーを「共同性を重視する空間」として描かなかった。オーセンティックバーにおいて見出されたのは、人々が都市の匿名性を利用しながら、固定化された関係性を望まないその姿勢だった。オーセンティックバーにおいては、人々が結合と分離に寛容な構えを持ちながら、ときに強いつながりを店外に逃すという実践によって、店内の結合と分離が共存する状態が実現されていた。

第二部の最後の章となる第5章では、世界内協働の前提を形作る歴史的経緯を記述、分析した。本章では、社会的世界の制度の成長を通して分析する自然史的方法論を採用し、日本バーテンダー協会の発展を分析した。オーセンティックバーの社会的世界は、明治時代から現在に至るまで、日本バーテンダー協会や関連する人々による「浄化」「抵抗」「制度化」の交渉過程のなかで、「オーセンティック」と呼ばれるに至った。

第三部では、第二部で記述してきたようなオーセンティックバーの社会的世界を維持させるためのいくつかの側面に着目をして分析を行った。

第6章で行ったのはインタビューデータを主とした、バーテンダーのキャリアの分析である。この社会的世界において労働者であるバーテンダーが重要な役割を示すことは第二部でも示してきたが、本章が示したのは、この「バーテンダー」がその価値観を獲得し、修行のなかで技術を磨き、そして独立していくその過程である。彼らがその労働と出会い、入職し、修行をし、腕を磨き、そして独立していくそのプロセス（キャリア

）には、「バーテンダー」同士に限らない人々との協働があった。この背景には組織／社会的世界がもたらす、店舗や関連施設の空間的近接性や、主に歴史性に基づく「東京（銀座）」の象徴性があり、彼らのキャリアは都市圏において実現していた。

第7章で参与観察を中心として記述したのは、店内の人々が一見客との邂逅のなかでいかに対処を行うかという点であった。常連客の入れ替えがあるオーセンティックバーにおいては「閉じること」「開くこと」のジレンマをいかに乗り越えるかが大きな課題であった。これに対して、オーセンティックバーでは店に入るまでの距離化と、店内において一见客を見極めた上で「やり過ぎ」したり、「教育」したり、時には「修正」するバーテンダーの実践が確認できた。これらの実践によって、オーセンティックバーは店内の秩序を維持しつつ、社会的世界にとっての経済的／人的資源を確保していく。

第8章で記述したのは、オーセンティックバーにおける身体的経験であった。本章はオーセンティックバーがもたらしうる陶酔経験を問うことによって、オーセンティックバーが求められる（維持される）メカニズムを指摘した。本章は補助線として、**M.Featherstone** や **Becker** を参照し、オートエスノグラフィーや参与観察を行ってデータを収集した。オーセンティックバーにおいては、集団的な解釈過程のなかでほどよく酔う（「計算された快樂主義」）ことが達成される。そして、その先には「鎮めの文化」としてのオーセンティックバーの陶酔経験が見出された。

最後に終章では、本論文が各章で行ってきた作業を振り返り、その知見を整理した上で、本研究で記述、分析してきたオーセンティックバーの社会的世界から見出せる都市的な性質として以下2点を指摘した。まず、本研究が記述してきたオーセンティックバーの社会的世界の維持に関わる実践は、都市の生態学的な効果（オーセンティックバー店舗同士の空間的な近接性／オーセンティックバーとその協働に必要な施設との空間的近接性）がもたらす恩恵を十分に受けていたといえる。また、オーセンティックバーの社会的世界の維持は、都市の匿名性やオーセンティックバーの空間によって達成される、審美性や「鎮め」を希求する精神性によって実現されていた。このような意味で、オーセンティックバーにおける都市は、単なる「舞台」として存在するだけではない（「都市で酔う」）。その社会的世界の維持は、都市的な特性に支えられていた（「都市に酔う」）。